実施年月日
3.12. 4
富山大学

令和４年度　富山大学大学院人文社会芸術総合研究科

人文社会芸術総合専攻（修士課程）人文・芸術プログラム　芸術文化学系

一般入試・社会人入試・外国人留学生入試

入学試験問題

小　論　文

注意事項

１．試験開始の合図があるまで，この試験問題を開いてはいけません。
２．問題用紙（本文）は３枚，解答用紙は１枚，下書用紙は１枚あります。問題用紙および解答用紙に不備があった場合は，手を挙げて監督者に知らせてください。
３．解答は，すべて解答用紙に記入してください。
４．受験番号は，解答用紙の指定欄に算用数字で記入してください。
５．試験終了後，問題用紙および下書用紙は，持ち帰ってください。

次の文章を読んで，後の問に答えなさい。

日本人が西欧文明に接触した幕末維新期には、すでに日本の内部に西欧文明を受け入れるだけの高度の文明が十分成熟していた。精神文化においても技術においても、生活文化においても幕末の日本文化の水準はすこぶる高度の段階に達しており、この文化が日本の近代的発展を一方で支えた伝統文化なのである。

明治維新以後、日本は急速に西欧文明を摂取しながら、この伝統的な文化を巧妙に組み合わせ、独自のモザイク模様を作り上げたように思える。たとえば生活スタイルが文明開化のかけごえのもとに激しい変化がおこった時代でも、建築を見ると、まず「公」の場から西欧的な建築様式が導入され、官庁や学校が洋風建築で建てられた。一般の住宅では、家のなかのもっとも「公的」な空間である応接間だけが洋風化する。つまり、都市というレベルで考えれば外来の文化と接するパブリックな建物が洋風で、そこに働く人びとも洋服を着るが、日常生活を営む家庭は和風であり、人びとは和装である。家というレベルで考えれば、応接間は椅子・テーブルの洋風でも、居間や寝間は畳の座敷である。西欧的なスタイルと伝統的な和風スタイルとは渾然と同居しながら、表向きのタテマエの世界と、日常的なホンネの世界と住み分けて同居する近代日本の生活スタイルが展開した。

今日では西欧的な生活スタイルは表面的な公の世界にとどまらず、深く実生活のなかまで浸透し、根底から日本人の生活を変えつつあるが、それでも伝統文化は失われることなく、祭礼や冠婚葬祭などの非日常的な場に顔を出し、古風な江戸時代的な風物がそのまま年中行事などに残されているのに出会ったりする。

今日からみて、伝統文化は決して失われはしなかったと思えるが、文明開化期にあっては、西欧文明の導入に性急で、伝統文化は人びとの関心からとり残され、衰退した。茶の家元では、弟子がほとんどいなくなって困難な生活を強いられたし、いけばなは茶の湯とちがって武士階級をパトロンとせず、大衆的基盤に支えられてはいたが、それでも維新直後の東京における花の書物の刊行は大きく落ち込んでいる。文明開花は伝統芸能にとって厳しい試練の時代であった。

ようやく伝統文化の世界に生気がよみがえってくるのは明治二十年代のことであった。いけばなでは、明治十年代には前代から流行していた文人花と技巧的な型の美を誇る生花とがわずかに流行し、明治二十年代以後にようやく新しい動きが登場してくる。その動きは、組織的には池坊を中心に全国組織が形成され、家元を中心とする中間教授

層の団体が整備されたこと、内容的にいえば洋間にふさわしい盛り花形式が考案されたことが注目される。いけばなは、新しい生活のスタイルにふさわしい自己変革を試みたのである。

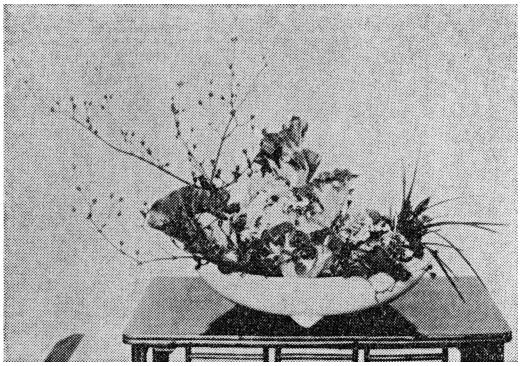

図１　盛り花　小原雲心作品

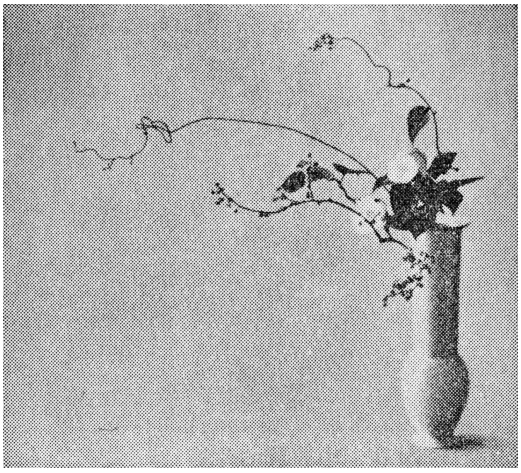

図２　自由花　山根翠堂作品

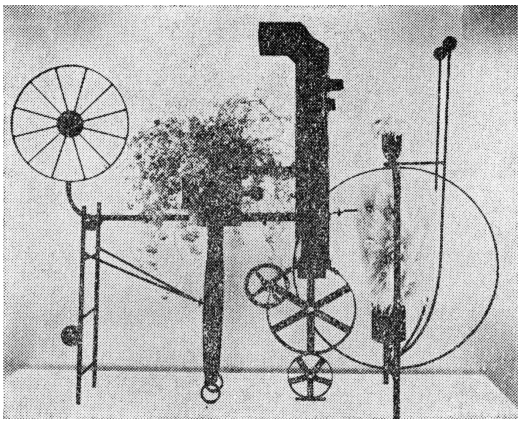

図３　機関車　勅使河原蒼風 1951 年作品

伝統芸能とは、江戸時代にその様式的完成をみた芸能が、近代社会において価値を認められ、受容されたものをいう。したがって、近代社会において何らかの新しい近代的意味づけが加えられ、近代生活にふさわしい何らかの変革をくぐり抜けた伝統であって、決して江戸時代までの文化がそのまま生き残ったものではありえない。いけばなにおいても茶の湯においても、こうした新しい解釈と様式的革新は、いろいろな形で試みられたのである。小原雲心（図１）や安達潮花などの人びとによって、明治から大正にかけ、盛り花形式が完成され、人気を集めた。本来、花型を中心にしていた流儀の花に新風を加え、自由な造形性をいけばなに求めようとしたのである。こうしたいけばなの近代における展開は、昭和期に入ると自由花とよばれる新しい様式が山根翠堂（図２）たちによって提唱され、知識人のなかに支持者を得、進んでいけばなは造形芸術へと転換する。

昭和八年（一九三三）、いけばなの近代的評論を積極的に論じてきた重森三玲を中心として、藤井好文、中山文甫、勅使河原蒼風（図３）たちによる「新興いけばな宣言」が発表され、ここに前衛いけばなが誕生した。その主張は、花材からの解放、花器からの解放、さらにいけばなを茶の間から解放するという点にあった。いけばなはここに生活文化であることをやめ、造形

芸術へと自己変革を遂げようとしたのである。

「新興いけばな宣言」は決してストレートにその後展開したとはいえない。なんといってもいけばなの生活文化としての性格は、一朝にして改められるものではなく、いけばなの主流は花材と花器と室内装飾としての性格を守ることになった。戦後、大きな盛り上がりをみせた前衛いけばなは、花道家の芸術性の表現として大きな意義はもったが、その一方ではいけばなの型の美が持つ強い伝統の力は日本の近代文化のなかでも揺るがなかった。

熊倉功夫　『生活と芸術』（放送大学教材 11050-1-8511）
放送大学教育振興会，158 頁－161 頁，1985 年より

注１　問題文１枚目の下から６行目にある「文明開花」という表記は，「文明開化」の誤字と思われるが，原文のまま記載している。

注２　図のキャプション番号を本文用に変更し，文中の参照箇所に括弧書きでキャプション番号を加筆している。

問　筆者の「伝統」についての論述を参考に，あなたが考える「伝統」の成立について，具体例を挙げて解説しなさい。（800 字程度）